

胸突き地蔵（子易神社）

むかし、高田道^{たかだみち}といって板橋宿^{かないくぼら}から金井窪村^{かないくぼら}を通り、池袋村^{いけぶくろ}を過ぎて高田村^{いた}に至る道^{みち}がありました。付近には人家も少なく、野原^{ぞうきばやし}や雑木林^{ぞうきばやし}がつづき、昼間は人通りがあっても、夜はあまり通る人もありませんでした。

池袋村^{いけぶくろ}で用^{もち}をすませて、日^ひが暮れてしまった王子村^{ちようじや}の長者^{ちようぢや}が、ひとりでこの夜道^{よみち}を急いでいました。子易^{こやす}の森^{もり}にかかった時^{とき}、急に道^{みち}ばたの茂み^{しげ}の中から大男^{おおおとこ}があらわれました。

「まてー」と言うなり、男^{おとこ}は槍^{やり}で突いてかかりました。提灯^{ちとう}をほうり出して逃げる間^まもなく、長者^{ちようぢや}は、物^{もの}とりのために胸^{むね}のあたりをグサリと突き刺^つされてしまいました。

長者^{ちようぢや}は、その場にどっとたおれ、何かしら死んでしまったような心持ち^{こころもち}の中で「仏さまお助け下さい、オン、カカカビ、サンマエイ、ソワカ」と、ひそかにとなえるのでした。しばらくして、



自分は死んでいないことに気がつき、どろ^{ほら}を払って立ち上り、刺^{はず}された筈^{はず}の胸^{むね}のあたりをさすって見^{いた}ました。痛みもなく、血も出ていません。提灯^{ひろう}を拾い上げ火^ひを入れ、あたりを見廻すと、道の辺^{ほとり}に石^{いし}のお地蔵^{おぢざう}さんが灯^{あかり}の光^{ひかり}に頬^{ほお}も笑^えみながら、すがすがしく立^たっていました。そして、胸^{むね}のあたりに真新しい槍^{やり}きずがついていました。お地蔵^{おぢざう}さまが身代^{みがわ}りになって下^{くだ}さったことがわかりました。

長者^{ちようぢや}は、お地蔵^{おぢざう}さまのお助け^{おたすけ}を感謝^{かんしゃ}しながら、のちにお堂^{どう}を作って差し上げたといひます。このお話^{お話し}は江戸時代^{えど}中頃^{なかつら}のこととされています。

今^{いま}、板橋二丁目^{いたばしにじちやうめ}にある子易神社^{こやすしんじや}の鳥居^{とりい}の脇^{わき}に小さなお堂^{どう}があって、その中^{なかに}に「胸突き地蔵^{むなつ}」がまつられています。七月二十四日^{しちがつにじゅうよっぴ}がご縁日^{えんにち}です。

子安神社前の地蔵堂（左）と胸突き地蔵（右）



代しろかき地蔵じぞう
(西光寺さいこうじ)

そのむかし、大谷口村おおやぐちむらに日頃から仏様を深く信仰していた心やさしいお百姓ひやくしやうさんがいました。

ある年のことです。明日は村中あげていっせいに田植えたうをすることになっていました。お百姓さんは、明日の田植えに間に合うように、汗を流していっしょうけんめい働きました。しかし、あたりがうす暗ぐらくなっても、代かきしろは半分もできていませんでした。お百姓さんは、あぜに立って、もう暗くなってしまった田んぼなを眺めながら

「ああ困こまった、明日の田植えをどうしよう…」と、大きなため息をしていると、どこからともなく若いお坊さんぼうが近よって来て「何かお困りのごようすですね、代かきが終わらなかったんですか…」と、やさしく話しかけてくださったかと思うと、いずれへか去って行ってしまいました。

一夜あけて、お百姓さんが田んぼに来て見ると、びっくりしました。広い田んぼは、きれいに代かきかえるがすまされて、蛙かえるの声



第2次世界大戦時中の集団疎開先での食事

もにぎやかに、初夏しよかの朝日がさんさんと田の面おもてを照らしていました。驚おどろいたお百姓さんは、あたりを見わたすと、田んぼどろの泥がてんでんと、田から丘の草原につづいているのに気づきました。その泥のあとをたどると、丘の小さなお堂にまでつづいています。お百姓さんは、不思議ふしぎに思いながら、お堂のとびらを開けてみますと、中に立っていらっしゃる石のお地蔵じぞうさんは、腰こしのあたりまで泥だらけでした。

お百姓さんは、お地蔵さんひとばんが一晩のうちに代をかいてくださったにちがいないと思って、涙を流してお礼を申しあげました。お地蔵さんはやさしいお顔をして、お百姓さんみおろをじっと見下していました。大谷口村の人びとは、それから後、このお地蔵さんしろを「代かき地蔵尊じぞうそん」とあがめて、あつくお祭りをいたしました。

今、このお地蔵さんは、大谷口二丁目の西光寺さいこうじに、手あつくまつられています。

西光寺の代かき地蔵



●板橋へのまなざし

櫻井先生は、60年以上にわたり板橋を生活の拠点としました。先生は、板橋区の住民のひとりとして、そして民俗や歴史・文化を研究する者として、自分の住んでいる地域について究めなければならないと、自らに向かって述べています。

そして、そのような気持ちをもって、地域の調査・研究活動を支えて指導し、さらに板橋の歴史を記した『板橋区史』の編さんにあたりました。

先生は急速に変化する板橋を、長い間、見つめてきました。

板橋の民俗や歴史・文化を考えると、中山道の宿場である板橋宿と周囲の農村との交流、そして、江戸・東京の都市化の問題、このふたつの視点が必要だといいます。

そして、常に都市化が進む板橋で、どのような民俗が消え、受け継がれ、また新たに生まれるのか。これを区民の暮らしの中から明らかにすることが大切だといいます。

先生の板橋を見つめるまなざしは、ここによく表われているように思います。

●地域研究へのまなざし

櫻井先生は中央の歴史や文化だけでなく、自分たちの住んでいる身近な地域の歴史・文化を調べ、学ぶことが大切だと思います。

板橋区においても、そのことを講演や『板橋区史』などを通して伝えてきました。

このリーフレットでは、先生が専門とした民俗学に即して見てきましたが、地域の歴史や文化を学ぶ学問はさまざまです。

先生は歴史学と民俗学のよいところを合わせて、地域の研究をすることが大事だといいました。また、考古学や民俗芸能研究なども視野に入れていたことが、先生の研究からわかります。



●櫻井徳太郎の残したもの

さらに、櫻井先生は自らが集めた図書や資料などを板橋区に寄贈して、区民をはじめとする人びとがそれを利用・閲覧できるようにすることを望みました。現在、それらは櫻井徳太郎文庫という名前で板橋区公文書館に所蔵され、一部を除いて見ることができます。



また、櫻井徳太郎賞は地域に基づいた調査研究の発展と文化の向上、人材の育成を目指して設けられました。「一般の部」「高校生の部」「小・中学生の部」に分けて、毎年、論文や作文を募集しています。

これら先生が残してくれたものを、今後ますます自分たちの学びに役立てていくことが、私たちにとって大切ではないでしょうか。

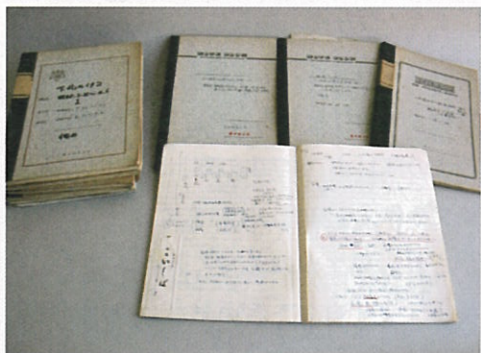


● 民俗学

櫻井先生は主に民俗学の分野で、さまざまな研究を行い、多くの著作を残しました。代表的な研究としては、①講集団の研究、②民間信仰の研究、③シャマニズムの研究、があります。

民俗学は、すでに説明したとおり、文字ではなく、口で伝えられてきたことや習慣・ならわしとして伝えられてきたことを調べて、昔のことを知ろうとする学問です。

同じ読み方で、「民族学」という学問もありますが、民族学が世界のさまざまな民族を対象として、現在では主に文化人類学と呼ばれるのに対して、民俗学は主に自分たちの国の歴史や文化を対象とを考えます。



● 講集団の研究

櫻井先生ははじめ、「講」という、地域の中で作られる社会集団について研究をしました。かつては講と呼ばれる集団が数多くありましたが、参加者や目的はさまざまです。

その中でも多く見られたのが、代参講だいさんこうといって、参加者がお金を出し合い、一年に一度、くじや順番で選ばれた人だけが、集まったお金を使って遠くの神社や寺院へ参詣するさんけいというものです。それを何度も繰り返して、最終的には全員が参詣できるようにします。



参加者のために社寺のお札おだをもらってくるという信仰的な面がありますが、旅行のような娯楽ごらくの面もっていました。よく知られる代参講としては、富士山に参詣する富士講があります。板橋にもかつて、永田講や山万講・丸吉講といった名前の富士講がありました。

また、頼母子講たのもしこうといって、参加者からお金を集めて、必要な人に順番に融通し合う講もありました。銀行などの金融制度が未発達な場合に役に立ちました。

先生は、これらさまざまな役割をもつ講を、その性質によって、①政治的・社会的な講、②経済的な講、③信仰的な講に分類し、その上で本来の講の性格が信仰に基づくものであるとの考えを示しました。

● 民間信仰の研究

民間信仰は、身近な地域の中で、より生活に即して、その地域の人びとに信じられているものです。

民間信仰といわれるものの内容はさまざまです。祖先をまつこと、地域や家族の繁栄・健康・安全、病気が治ることを願って神仏に祈ることなど。田畑の豊作などを願って行う祭りもそうです。

さらに、妖怪の研究や呪いなども民間信仰のひとつと数えることができます。櫻井先生は、山道でとり憑いて人を動けなくするといわれるヒダル神やジキトリ(食取り)・ガキボトケ(餓鬼仏)・ノツゴという妖怪についても研究をしています。

また、先生は、地域の民間信仰が仏教などの影響を受けて作られてきたことが重要だと考え、それを研究しました。



● シャマニズムの研究

シャマニズム(シャーマニズム)とは、神仏や靈魂を自らに乗り移らせて、その言葉を語ったり、予言や病気を治したりすることです。それを行う者をシャーマンといいます。櫻井先生は東北地方のイタコや、沖縄・奄美地方のユタなど、日本各地のシャマニズムの調査を行ないました。

また、調査を東アジア、特に韓国のシャマニズムにまで広げ、世界との比較を試みしました。

時代とともに、シャーマンの数は減っています。櫻井先生が残した調査記録や著作は、かつてのシャマニズムを今日に伝える貴重な資料といえるでしょう。

